

共に考える

住宅デザイン

○109○

甲斐 徹郎

子どもと他者の関係

昨今、学校での深刻な犯罪が報じられるたびに「キレる子どもたち」という言葉を耳にします。子どもたちを取り巻く環境に何が起きているのでしょうか。

人は、常に他者との関係があって成長します。子どもは、さまざまな人間関係を持つことで社会性をバランスよく身につけて成長します。今回のコラムは、そうした子どもと他者との関係という点から、住まいを見直してみたいと思います。

1971年、三十年の間に、住宅が工場で生産される高度な技術によってつくられるようになったことで、住宅そのものが外の環境とかわりあいなしに快適な空間を実現できるようなり、私たちの生活領域はどこぞの室内の中に閉じこもって過ごすようになりました。

出合いがバランス培う

ケーションという、身体感覚を伴わない関係が当たり前になり、子どもたちの成長に大きな影響を及ぼしているのではないのでしょうか。

しかし、彼らにとって、自分は孤立したくないという切実な思いから、インターネットという場を求め、自分自身の精神的なバランスをとろうとしているのだと思います。

では、近所のおじさん、おばさんとの関係や地域での出合いはほとんどなくなってしまう、家と、学校や塾との往復といった、ポイントでの行動範囲に限られるようになってしまっています。

結果として子どもたちは、他者とのコミュニケーションの中でバランス感覚を育てる機会がたいへん少なくなってしまうました。

子どもたちが引き起す点から、住まいを根本的に見直す必要があるように思

住環境も成長に影響

ます。これまでのコラムの中でもお話ししましたが、現代の住環境を成り立たせている技術は、外の環境にかかわらず、室内環境を快適にすることができ、外の環境に対して開いて関係性を結ぶことが難しくなっています。

こうした高い水準の技術や、外の環境との関係性を断つ閉塞傾向が子どもたちの成長に大きく影響していることは容易に想像でき、もう一度、住まいのあり方を問い直す

べき時期にきているので、開くことが、より快適で豊かであるというのを、実際の住まいの環境

ンサルタント)の中で実現させることが重要な意味があると思います。

「住まい」という日常の環境において、身体感覚を伴った、他者との出合いとコミュニケーションを通じて、個人のバランス感覚を養うことのできる環境をつくりだすことが重要だと思

います。



豊かなコミュニティ空間として再生された古民家の庭—東京・世田谷区

「環境共生」「環境配慮」という観点から、環境を、住まいの快適性や豊かさにつなげるという試みがなされています。それがただにとどまらず、子どもたちの生活の場を個室に閉鎖させずに開くことが、より快適で豊かであるというのを、実際の住まいの環境